石川 ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No.154
2026.4.23

令和8年度 春季特別展

鷹と加賀前田家

2026
4/25(土)
▸6/7(日)

令和8年度 春季特別展

鷹と加賀前田家

2026 4/25(土)▸6/7(日)

開館時間 9時～17時
展示室への入室は16時30分まで

観覧料
- 一般1,200円（960円）
- 大学生・専門学校生960円
- 高校生以下無料

※（　）内は団体料金・65歳以上は団体料金
※障害者手帳・「ミライロID」ご提示の方および付添１名は無料

鷹は、古くから各時代の権力者に愛好された生き物で、江戸時代の将軍や大名が所有した鷹は「御鷹」と呼ばれ、権威性を帯びた特別な存在でした。加賀前田家の当主も多くの鷹を所有し、その鷹を使って鷹狩を行っていました。本展では、前田家に伝わった鷹道具、古文書、絵画資料などから、鷹をめぐる前田家の歴史を明らかにします。

表紙資料

架鷹図屏風 初公開

江戸時代（17世紀）
公益財団法人前田育徳会蔵

オオタカの幼鳥・若鳥・成鳥、ハイタカやハヤブサなどが描かれた架鷹図。上部の賛は元和期（1615～24）に加賀前田家３代・利常の庇護を受けたと考えられる明人・王伯子（字は國鼎）による。

序章 江戸時代における鷹狩

鷹狩図屏風 久隅守景筆

江戸時代（17世紀）日東紡績株式会社蔵

江戸時代前期の絵師・久隅守景（生没年不詳）による鷹狩図の名品。水辺の田園風景が広がり、鷹狩に従事する鷹匠や餌指役の姿や、鶴・雁・鴨などを仕留めるオオタカやハイタカの様がいきいきと描かれる。

Image：TNM Image　（左隻）

1章 鷹場と環境

石川河北両御郡御鷹場絵図

天保14年（1843）金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

金沢近郊の鷹場を色分けで表した絵図。緑色が藩主しか鷹狩ができなかった「定御留場」である。金沢周辺は、藩主しか鷹狩ができなかったことがわかる。

大緒

江戸時代～明治時代（19～20世紀）
公益財団法人前田育徳会蔵

前田家伝来の大緒。大緒とは、鷹を据えたり架にとめたりする時に鷹の足革につないだ紐のことである。

2章 藩主と鷹狩

鈴板 初公開

江戸時代（19世紀）
公益財団法人前田育徳会蔵

鈴板とは、鷹の尾羽に鈴と一緒に付けた板のことである。「松平加賀守」と筋彫りした後、金で文字を施している。「松平加賀守」は、将軍から与えられる称号（松平）と受領名（加賀守）である。

韝 初公開

江戸時代～明治時代（19世紀）
公益財団法人前田育徳会蔵

前田家伝来の韝。鷹を左の拳に据える時に使用した。

3章 鷹狩を支えた人々

足革木型 初公開

江戸時代（18~19世紀）個人蔵

鷹匠の依田家に伝わった足革の木型。木型には、「大鷹」「鷂」などの鷹の種類が書かれており、鷹の大きさによって足革のサイズを変えて製作されていたことがわかる。

足革

江戸時代（18~19世紀）石川県立図書館蔵

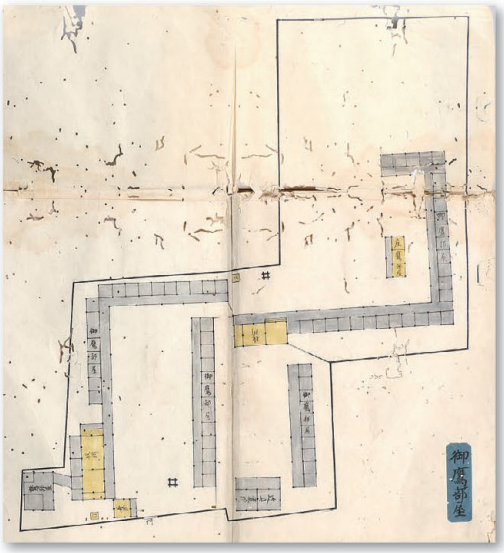
鷹匠の宇野家に伝来した鷹の足に付けた足革。足革は、鷹の左右の足に付け、先の方は鷹を据える時に鷹匠が持った。

白鷹図

万延元年（1860）
東京国立博物館蔵

安政４年（1856）11月に、現在の内灘町で鷹匠の宇野富素によって捕獲された白鷹を描いた作品。作者は、加賀藩御用絵師の佐々木泉玄で万延元年（1860）に描かれたと伝わる。

4章 鷹を飼う



御城外諸役所絵図

天明５年（1785）頃　当館蔵

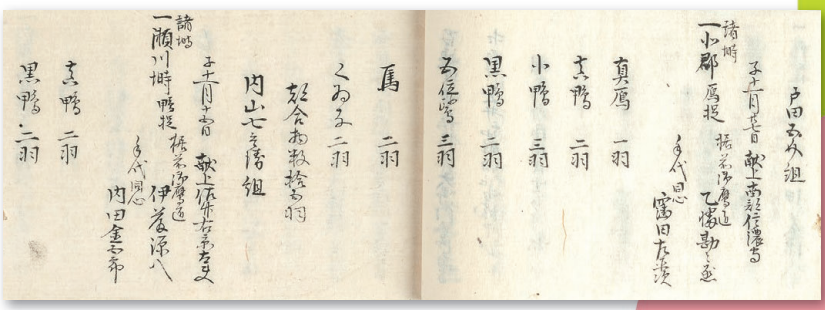
鷹部屋の絵図。通常の鷹部屋、番所、道具置場のほかに、上納された雛である巣鷹を入れる産鷹部屋も描かれている。

5章 鷹をめぐる贈答儀礼

御拝領御鷹於御国許御頂戴一件

文政13年（1830）金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

天保元年（1830）12月に藩主斉泰が将軍家斉から鷹２居を拝領した時の史料。２居は、もともと盛岡藩主南部利済、秋田藩主佐竹義厚が家斉へ献上したものであった。



終章 近代へつづく鷹狩

15代 前田利嗣肖像写真

明治22年（1889）前田土佐守家資料館蔵

前田家15代当主である前田利嗣の写真。利嗣は狩猟を好み、東京転居後も別邸の四谷・深川邸のほか、旧大名家の毛利氏の別邸などで鷹狩を行っている。

特別展の関連イベントについては裏表紙の「催し物案内」または当館ホームページ・チラシをご覧ください。

資料紹介

鈴板の製作とその装着目的

学芸主任　林　亮太

鷹道具とは、鷹狩や鷹の飼育過程において用いられた道具のことを指す。鷹道具は様々なものがあるが、ここでは鈴板を紹介したい。

鷹には、獲物をつかんで草むらなどに入り込んだ時、居場所を特定するために鈴を付けていた。鈴板とは、その鈴の音が響きやすくするために付ける板のことである。鈴板は、鯉のエラ蓋、象牙、水牛の角で作られた。そのなかでも、加賀藩では「鈴板ニハ鯉之えらふた宜敷候」と、鯉のエラ蓋を使ったものが良品とされた。エラ蓋は、城内において鯉を捌いた際に保管し、それを干して利用していた（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵「若年寄方諸事留 3」）。

前田家では、御細工所が鈴板をはじめとする鷹道具の製作を担っていた。たとえば、享保11年（1726）5月、御細工奉行の有沢森右衛門は若年寄の玉井市正に呼び出され、鈴板の大5枚、小5枚を製作するように命じられている。若年寄は、鷹匠などの役人を支配していたので、鷹匠からの要望を受け、御細工奉行に製作を命じたと考えられる。その後、若年寄・御細工奉行・御細工人の間で細かくやり取りしながら作業が進められた。その過程で、若年寄（家老兼帯）の中川式部は、少し裏の方をくぼませて製作するようにと指示している。これは、鈴板を尾羽にフィットさせるための工夫であろう（以上、『加賀藩御細工所の研究 2』金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1993年）。

鈴板には、鷹の持ち主、あるいは鷹の調教者の名前が書かれていた。享保期には、名前を彫ったあと、朱漆を入れるようにと若年寄から指示が出ている（『加賀藩御細工所の研究 2』）。たしかに図の享保期の鷹匠である宇野七丞の鈴板をみると、名前の部分に朱漆を入れていることが確認できる。鷹は、調教中に行方不明になることがあった。鈴板に名前を記す目的は、鷹の持ち主や調教者を特定するためであろう。では、実際の「迷子鷹」の事例をみよう。

元文3年（1738）8月、鷹匠取次役から若年寄のもとに、石川郡三納村（現在の野々市市三納）の百姓善右衛門がハヤブサ1居を捕えたという情報が届いた。このハヤブサに付いていた鈴板には「伴八矢」（藩士）と書かれていた。若年寄のもとには、これ以前に八矢のハヤブサが行方不明で、もし捕えたら届けてほしいという情報が届いていた（以上、近世史料館「若年寄方御用留」）。その後、このハヤブサは八矢のもとに届けられたであろう。

藩主斉泰が所有したハイタカも、野々市村で調教中に行方不明になり、その後、砺波郡大窪新村（現在の富山県南砺市大窪）で百姓によって発見された。鈴板に「松平加賀守」と記されていたことから、金沢の鷹匠小頭宅まで届けられ、藩主の鷹であることが確認された（個人蔵「（覚書）」）。なお、この鈴板とは別物だろうが、「松平加賀守」と書かれた鈴板は、前田家に伝存している（本誌2頁参照）。当初は、鈴板に記す藩主名は統一されておらず、享保11年（1726）3月以降、「御名字・御受領之御名」にするように藩主吉徳から指示が出ている（近世史料館蔵「若年寄方諸事控 3」）。これ以降、表記が統一されたであろう。

以上のように、鈴板の装着目的には、鈴の音を響きやすくするという本来の目的とは別に、鷹の持ち主や調教者を示すという目的もあったのである。

図　宇野七丞の鈴板（石川県立図書館蔵）

※本図は現存部分に線を補って作成した。
作図は、当館職員北﨑美沙子による。

特集　令和６年 能登半島地震によせて

Vol.9

『石川れきはく』146号（2024年4月発行）で掲載を開始した「特集　令和6年能登半島地震によせて」は今号で９回目、連載３年目に突入しました。文化財レスキューの「今」を伝えることを目的に始め、これまで文化財レスキュー活動に取り組む学芸員の所感を掲載し、被災地に関連した文化財紹介をおこなってきました。発災から丸２年が経過し、被災地への関心の風化が懸念されていますが、今年度の『石川れきはく』でも引き続き、被災地にまつわる歴史資料の紹介をおこないます。本特集が、多くの方々が能登の文化財に関心を寄せるきっかけになれば幸いです。

能登と大阪・中之島の幻の料亭「銀水楼」

学芸主任　中村　真菜美

発災以来、被災した美術資料をめぐっては、「大事だと判断できるものがあれば救出してほしい、一時保管後は寄付を考えている」という相談が殆どであった。公費解体が迫るなど時間的制約のある中での判断には悩みが尽きないが、ここに紹介する中能登町能登部の個人宅のケースは印象深いものであった。

2024年２月、所有者のご息女から当館に対して、被災家屋の解体にあたり、所有する美術資料の処遇を相談された。事前に資料の写真を送付いただくと、関西を拠点とした画家の屏風が多数を占めた。一見、石川県ゆかりの資料とは言い難く、一時保管後の扱いに悩むだろうなというのが正直な思いだった。とにかく実物を見ようと、所有者が住む能登部へと急いだ。

所有者（昭和21年生）とそのご令姉（昭和７年生）にお話を聞くと、資料の伝来について意外な事実が判明した。これらは幕末から明治初頭の大阪相撲で活躍した能登部村出身の力士・鹿島崎幸松（1846～1924、本姓・三浦）が大阪・中之島で営んだ料亭・銀水楼で使用されていたという。幸松は21歳で角界に入り、四股名は鹿島崎、最高位は前頭二枚目。明治27年(1894)に千田川の名跡を継ぎ、同31年に廃業した。銀水楼は明治26年には既に開業しており、場所は中之島１丁目、現在の大阪市中央公会堂の北手濱側で、大広間を５つほど備え、川に沿って細長い庭を構えた造りであったという【図１】。銀水楼は大正２(1913)～７年の中央公会堂建設に伴う立ち退きにより営業を終え、幸松ら一族は故郷の能登部に戻り、能登部銀行を設立、長男が能登部村の村長を務めるなど、同地の発展に尽力した。

救出した屏風は計５点、作者は近世・近代の関西ゆかりの画家や僧で、岡田東虎(1755～1822)、奥谷秋石(1871～1936)、深田直城(1861～1947)、紫石聯珠（黄檗山萬福寺第43代管長、1842～1914)、祥雲（萬福寺塔頭瑞光院の画僧、生没年不詳)、尾竹竹坡(1878～1936)。書画骨董が飾られ、多くの文化人が出入りして書画会が開かれるなど、社交サロンとしての役割を担った銀水楼の往時が偲ばれる。特に注目されるのは、反骨の日本画家・尾竹竹坡による金地の山水図屏風【図２】である。明治44年(1911)４月に美術団体・巽画会の大席画会が銀水楼で開催され、メンバーの竹坡も来訪した。本作はこの時に制作された可能性が高く、墨線の揺れなどに即興の感覚が認められる。

こうした能登と大阪・中之島の予想外の繋がりが判明した時、石川県とはゆかりのない資料だと安易に判断しそうになった自分を恥じた。緊急事態だからこそ資料調査の基本を守ること、つまりは現場に赴き、資料の実見と聞き取りを欠かさないこと、そのような教訓を得た一件であった。

【図１】　銀水楼外観
外観や内観を写した貴重な写真絵葉書も一緒に伝わる。この建物の一部は能登部へ移築されていたが、今回の地震の被害により解体された。

【図２】
尾竹竹坡　山水図屏風
中之島・銀水楼伝来

研究ノート

〈狼〉を見た最後

副館長　大門　哲

令和８年度、春・夏続けて生き物と人の交渉史をテーマとする特別展覧会を開催することに寄せて、幻となった動物の消息を見つめる。

1　藩政期の記録と伝承

石川県の人々はどんな動物を恐れたのか。人への殺傷被害の多さからして狼（ニホンオオカミ）を超える存在はいないだろう。石川県内の古文書を通覧すると、その名称表記は文化期まで「狼」、それ以降になると「大犬」に変化する。

民俗学者の千葉徳爾は名称変化の背景に雑種化による生態的異変を看取する（『オオカミはなぜ消えたのか』）。いずれにせよ、近世後期には狼・野犬、さらには狂犬を含め、大犬と呼ぶようになった。

その影響だろう。県内の聞き取りで認められる狼の呼称はオオイヌ・オオイン・オイヌである。ただし、「大」や「御」を接頭するのは古くからの全国的な傾向であることに留意が必要である（菱川晶子『狼の民俗学』）。その背景には山の神として、または農作物を鹿や猪から守る益獣として敬う観念があったためとされる。

藩政期における石川県内のオオイヌ(狼)・鹿・猪の獣害についてはつとに千葉徳爾が30件余の事例をもとに検討している（前掲書）。被害は甚大である。千葉が用いなかった史料を紹介すると、安永３年(1774)５月１日朝、谷内村（現輪島市）の61歳女性・43歳男性・11歳女性が噛まれ、いずれも後日、病死している（「谷内村狼による人馬損傷書上」『輪島市史』第２巻）。また弘化２年(1845)７月５日夕方、土川村（現七尾市）の４歳女児が戸外に出るや腹を食い破られ二日後に死亡した（「末世目覚草」『石川県中島町史　史料編』）。輪島の方の死因は狂犬病であろう。

注目すべきは被害分布である。鹿・猪の害は旧能美郡や能登の山麓にかぎられたが、狼の場合、金沢市内の平野全体にひろがる。平野部に位置する同市北町には、狼に襲われた馬の慰霊塚が建つ(図)。その行動範囲を示す貴重な資料といえる。

城下にまで狼が出没したことを示すのが元禄５年(1692)２月１日の対応である（「一巻帳大概」『加賀藩史料』５編）。町中が出現に大騒ぎとなり、武士の寺西孫九郎が自らの屋敷内で槍で退治したことがあった。同情すべきはその後である。綱吉の治世下、武士は追放処分となった。

金沢の人々がいかに狼に恐れたかは、先祖の経験談が今に受けつがれていることからうかがえる。以下は、平成21年(2009)に筆者が聴取した話である。

「一種の狼みたいなもんやね、オオイヌというのが高尾山や窪山のあたりにおって、磔にすると、死体を喰いに来とった、と。田圃の時期は、朝早く起きて水まわりを見に行ったが、磔があると、オオイヌがまだおるかもしれんので、水まわりをひかえたと聞いとる」（大正８年生・泉町・男性）

町端の住人は、絶滅後も久しく狼の幻影をみながら暮らしていたのである。

狼に襲われた馬の慰霊塚（馬頭尊塚）
金沢市北町
陰刻銘「弘化二乙巳六月
施主　仁右衛門
世話人　若連中」
高さ１m

２　明治以降の記録

では明治以降、人とオオイヌ（狼）はいかなる関係にあったのか。関連記事の初見は明治11年（1878）３月である。13日朝、柳田村（現能登町）で、老父が寺参りの際に、また同家娘が通学途中に「山犬・狼」に噛付かれ、ほか瀧村（現能登町）で２，３人が被害にあった（19日「石川新聞」）。

下って、明治26年11月には山中村上野（現加賀市）の病院脇で自殺した人の肉を「狼犬」が襲い、飽きると咆哮し、それにつれて飼い犬も鳴くので、住人は寂寥たる気分でいるとみえる（１日「北國新聞」）。

ちなみに、同時期、北陸一帯で狼は餌不足に陥っていたのか、翌27年12月に「狼」が隣県富山の子撫村法楽寺（現小矢部市）の馬殺し場に現われ人を襲うため、猟師３人に駆除を依頼している（９日「北國新聞」）。

明治30年７、８月には金沢の小立野辺りを「狂犬」が徘徊し８歳の男児に噛付くなど人畜被害が多発した（８月12日「北國新聞」）。明治30年以降、全国的に大発生を繰り返した狂犬病の影響を推定できる（唐仁原景昭「わが国における犬の狂犬病の流行と防疫の歴史」）。

明治40年代に入ると、加賀南部での群れ行動が頻繁に報じられるようになる。注目すべきは41年６月29日付「北國新聞」記事である。以下要約を記す。

［能美郡御幸村今江の杉の木街道から江沼郡勅使村松山の亭の山に至る松樹丘陵の間は昔から「狼」が大日山・鞍掛山・菩提蘆谷の山中から塩水をのみに出る道筋で幾十の群に出会うと言い伝えられていた。去年から江沼郡分校村から那谷村にいたる山中の小牛が谷・粟津停車場付近で百数十の群れに出会い、遁走した者がいたことから、農夫は日中でも研ぎ立ての鎌を腰にさし、また粟津・那谷・矢田野の人々は小松・動橋に出るときは護身のため刃物を用意しているという］

塩水をもとめた話が興味深いが、菱川晶子によれば、同類の伝承が全国的にみられるのは動物のなかで狼だけという（前掲書）。ちなみに、小松市から加賀市の山間部が棲息地であった可能性は、小松市波佐谷町旧家に狼退治に用いた槍が伝来したことからも示唆できる（『能美郡誌』／2026年現在消失）。

それから２ヶ月後の８月中旬には北部に一部が移動したのだろうか。粟津村木場、苗代村三谷・蓮代寺・本江・千木野（現小松市）などで鶏が２，30羽ぐらいずつ紛失するので、夜な夜な見かける「野犬」の群れの仕業に違いないと、夜間警備をするようになった（９月８日「北國新聞」）。

このとき見た群れは、９月16日、「狼」として捕獲される。管見のかぎり石川県での目撃・捕獲に関する最後の資料と思われるため、全文を掲げる（20日「北陸新聞」／一部筆者伏字）。なお、報告にあたり関係集落を訪ねたが伝承は確認できなかった。

「能美郡粟津村字木場と大杉谷村字波佐谷の山中に棲息し居れる狼、近頃木場、三谷、浅井等の各字に出で來たり家禽を捕ふること數百羽に及び、村民は何れも怖れを抱きて夜になれば戸外に出でざるより、狼は得たり賢しと毎夜の如く出で來たりて荒らし廻はり居りしが、去る十五日夜は木場の〇〇〇方豚小屋を襲ひ、豚児三頭を浚らひ行きしより、血氣にはやる村の若者共モウ堪忍がならね江と力味返り、十六日の夜、手に手に獲物を携へて向ふ鉢巻手に唾して待伏せ居ると、案の定二頭の狼三頭の児を伴ひて現らはれ來たりしにぞ、先づ鐵砲で荒膽を挫き呉れむとズドンと一發放ちしに驚いて狼は一頭の児を伴ひて遁げ去りしかば、殘れる二頭の狼児を生捕りにし、目下山口某方にて飼育し居れるが、親狼は生捕られし二頭の児を慕ひて毎夜同字へ出で來るも人影を見れば直ちに遁去る由」

近辺住人はその後もおびえながら暮らした。11月初め、白江村（現小松市）では鹿を狼に間違えパニックに陥っている（９日「北陸新聞」）。明治41年の報道で注目すべきは大群だったことである。群狼について民俗学者の柳田國男は本来の生態とし（『狐猿随筆』）、また生態学者の今西錦司は絶滅の前兆とし（『遊牧論そのほか』）、歴史学者の塚本学は今西説を支持した（『江戸時代人と動物』）。藩政期に遡っても100匹以上の群れは記録になく異常事にあったことは確かである。

公式見解ではニホンオオカミは明治38年１月に奈良県で捕獲されたのを最後に絶滅したとされる。しかし、記事の「狼」がニホンオオカミとすれば、石川県では明治末頃まで生き延びたことになる。

ちなみに、正確にいうと石川県民が「狼」を目にしたのは明治41年が最後ではない。巡回動物園で見物する機会があった。当県に「狼」が巡回したのは同44年10月（宮城動物園）、大正４年（1915）９月・同６年５月（矢野動物園）である。明治43年８月に動物団を小松へ鉄道移動中に福井県内で満州産狼が逃げた騒動が起きたことを鑑みると（５日「北陸新聞」、長野栄俊「一九一〇年の「純日本種狼」」）、目にしたのはいずれも日本産でないと思われる。

催し物案内 Information

各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします。

4月　休館日：4/22日(水)～24日(金)

25日(土)　「鷹と加賀前田家」展示解説　要展覧会チケット／申込不要
13:30～14:30

26日(日)　「鷹と加賀前田家」ワークショップ　無料／体験のみ要申込
「放鷹術実演・鷹匠体験」10:00～／14:00～
講師：吉田 剛之 氏（株式会社鷹丸／NPO法人日本放鷹協会会員）

5月　休館日：なし

2日(土)　石川の歴史遺産セミナー 13:30～15:00　無料／要申込
「加賀前田家における鷹狩と鷹の献上」第１回
「加賀藩の鷹場」
講師：武井 弘一 氏（金沢大学人間社会研究域学校教育系教授）

10日(日)　「鷹と加賀前田家」ワークショップ　無料／体験のみ要申込
「放鷹術実演・鷹匠体験」10:00～／14:00～
講師：吉田 剛之 氏（株式会社鷹丸／NPO法人日本放鷹協会会員）

16日(土)　石川の歴史遺産セミナー 13:30～15:00　無料／要申込
「加賀前田家における鷹狩と鷹の献上」第２回
「加賀前田家の「御鷹」― 鷹狩と鷹の調教」
講師：林 亮太（当館学芸主任）

19日(火)　「鷹と加賀前田家」展示解説　要展覧会チケット／申込不要
10:30～11:30

24日(日)　「鷹と加賀前田家」スペシャルトーク　無料／要申込
13:30～15:00
「もっと知りたい！鷹匠の世界」
講師：吉田 剛之 氏（株式会社鷹丸／NPO法人日本放鷹協会会員）

30日(土)　「鷹と加賀前田家」展示解説　要展覧会チケット／申込不要
10:30～11:30

30日(土)　石川の歴史遺産セミナー 13:30～15:00　無料／要申込
「加賀前田家における鷹狩と鷹の献上」第３回
「加賀藩前田家のハヤブサ献上」
講師：越坂 裕太 氏（九州大学記録資料館准教授）

6月　休館日：6/8日(月)～9日(火)

27日(土)　れきはくゼミナール 13:30～15:00　聴講無料／申込不要
「前田治脩「太梁公日記」に見る美術工芸品」
講師：中村 真菜美（当館学芸主任）

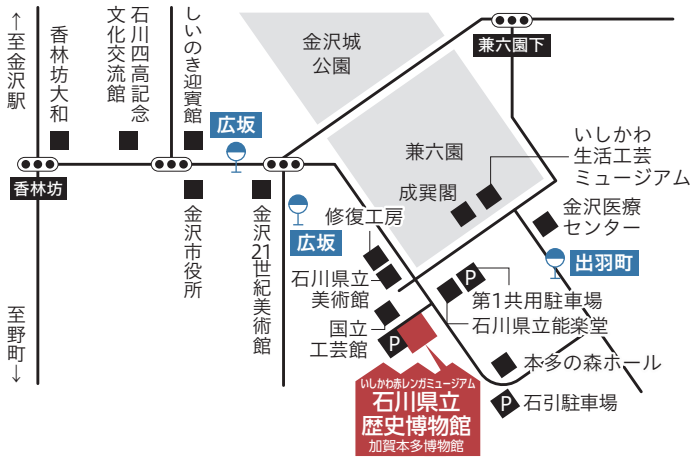
次回展覧会のお知らせ

夏季特別展 **発見！れきはくの生きものたち**

令和8年(2026) 7/25(土)～8/30(日)

本展では「生きもの」という共通テーマのもと、当館の所蔵品を中心に、学芸員たちがそれぞれの専門性をいかして選び抜いた資料を展示します。気候変動の深刻化に伴って「自然」との向き合い方が改めて問われている現在、歴史学的・民俗学的観点から、過去から現在に至るまでの人間と「生きもの」の関係を振り返る必要があるでしょう。石川の歴史に刻まれた、人と生きものの歩みを見つめます。

石川県指定文化財　能登国採魚図絵　天保９年(1838)　当館蔵▶



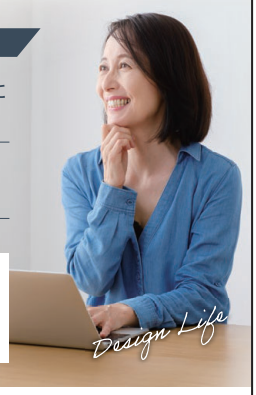
いしかわ赤レンガミュージアム
石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL：076-262-3236　FAX：076-262-1836
E-mail：rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
https://ishikawa-rekihaku.jp/

広告

広告代理店が運営する
KITEN SCHOOL
大人のためのデザインスクール

キテンスクールのオンライン授業なら…
01　オンラインで好きな時間にマイペースで学べます
02　スキルアップ・副業・趣味に活かせます



詳しい資料のご請求はこちら

キテンスクール　tel:072-668-3275
〒569-0071 大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501　運営 株式会社ウィット